

猫山の化け猫の話



小奴可の民話

昔、猫山には化け猫が住み着いていて、山に入る人々がたひたび食い殺されてきた。  
 その頃、東城川東に鉄砲の名人といわれた獵師がいた。獵師は、鳥獣の殺生ばかりしているのに少々嫌気を感じていた矢先、ひとつ、化け猫退治をして人助けをしようと思いい立ち、夕方から山

に入ると、化け猫が現れるのを待った。幾日目のある時、提灯をさげた人影が「お父さん、お父さん」と呼びながら近づいてくる。「お母さんが急病なので早く帰らんさい」と、よく見ると息子である。家族には、どんなことがあっても山に来るなど言っておいたし、息子が隠れている場所を知っているわけがない。獵師はすぐふる迷ったが、意を決して、化け猫に違いないとストンと一発引き金を引いた。提灯の火はたちまち消えて、「ギヤーツ」という悲鳴は人の声ではない。  
 まもなく夜が明けたので、獵師はあたりを探したが、死骸も提灯もない。ただ、べつとりと血糊、それから点々と血の跡がある。たどっていくと山の麓の一軒の家で途切れている。それで、獵師は家の人に「タへ、お宅で何が変わったことはなかったですかの？」尋ねてみると、「ハイ、婆さんが雪隠に行くと、物干し竿で目をついて寝込んでおります」という答えで、不審が強まる。そこで無理に見舞うと、お婆さんは布団をかぶって姿を見せない。獵師は思いついて、布団の上からお婆さんを打ち殺した。家の人がびっくりして布団をのけてみると、床の上には大きな山猫が横たわっていた。獵師に教えられ、家の人が床板をはがしてみると、化け猫にかみ殺されたお婆さんが、白骨になって散らばっていた。  
 猫山の化け猫の話はこのほかにもいくつか伝わっている。



どんじ岩

故蘇山の南側、小串と千鳥の境に「どんじ岩」と呼ばれる大きな岩がある。「どんじ」とは、ひとのものを二人で奪い合うことで、この地方の方言である。  
 昔、小串に野田の実(じつ)、千鳥には谷剛壮(たにこうさく)という大変な力持ちがいた。ある時、千鳥と小串の境を決めるにあたり、この二人が岩を中心と争った。野田の実が一人、岩を持って千鳥側へ運ぶと、今度は谷剛壮が小串側へ持って行くというよう

に、お互いに自分の方の土地が多くなるように努力した。二人とも力が強いので、なかなか決着がつかない。少しずつ体力が衰え始め、とうとう持ち運ぶことができなくなり、今度は岩を互いに反対の方向へ引きずり始めたのである。二人が引き合っているうちに、岩はボカリと二つに割れてしまった。この時に、二人とも精根尽きてその場に座り込んでしまった。これによって、千鳥と小串の境界が決まったとこのことである。